

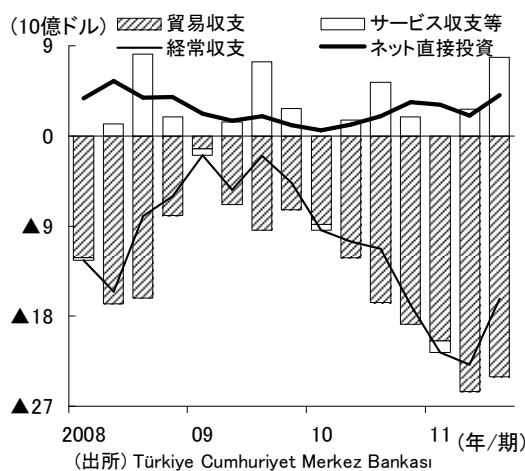


高度化進むトルコ経済

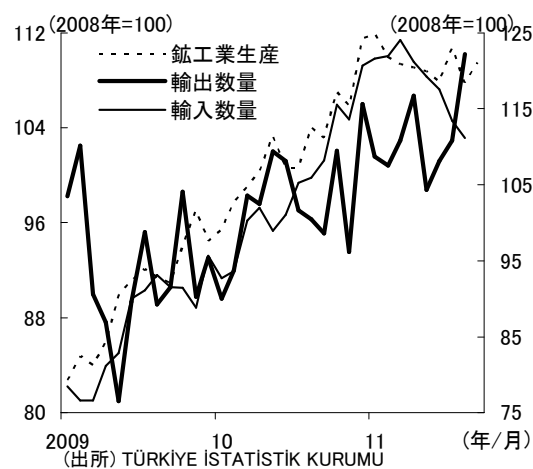
～ 盛り上がる研究開発投資と拡充する研究スタッフ ～

- (1) 本年7～9月期のトルコ経常収支赤字幅は4～6月比旅行収支の好転によって改善（図表1）。もっとも、改善幅は15億ドルとわずかなうえ、貿易赤字を中心に赤字幅は依然高水準。一見すると、消費を中心に好調な内需に国内の供給力が追いつかない同国経済の脆弱性が示唆。
- (2) しかし輸出入数量をみると、輸入数量が本年春をピークに減少するなか輸出数量はリーマンショック後にV字型回復を遂げた後の一進一退から本年春以降増勢転換の兆し（図表2）。貿易収支の赤字幅拡大は、原油をはじめとする一次産品価格の上昇が主因。一方、鉱工業生産は本年入り後、弱含む兆しもみられたものの、春以降、一進一退。実質ベースでみれば、本年春以降、外需が同国経済を牽引。
- (3) 外需主導の原動力は、まずリラ安。Jカーブ効果は2四半期前後経過して本格化する過去の経験則から、昨年10～12月期と今夏の為替相場を米ドルベースで比べると、2割下落。加えて外資流入が昨年下半以降、再び盛り上がり（前出図表1）。
- (4) さらに、研究開発投資の活性化。汎用製品の組立工場や鉱物資源採掘など低付加価値分野から脱却に向けた取り組みが本格化。まず投入資金をみると、09年からGDP比0.8%台へ（図表3）。一方、研究スタッフも増勢加速（図表4）。セクター別には、従来は基礎研究主体の大学。近年の盛り上がりは応用研究や製品開発に重点を置く企業がリード。研究スタッフの拡充は、高等教育機関卒業生だけでなく同国経済の躍進を受けた帰国人材が下支え。先進国に比べれば未だ見劣りするものの、新興国のなかでは研究スタッフ数が雇用者千人中2.7人と1.5人の中国を大きく上回るなど先行。引き続き同国経済の底堅い成長持続の公算大。

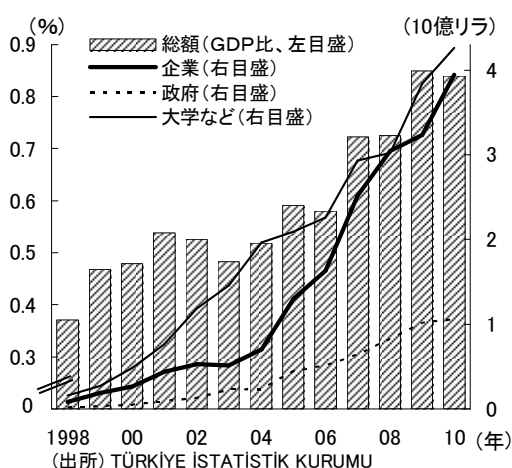
（図表1）トルコの経常収支とネット直接投資



（図表2）トルコの鉱工業生産と輸出入数量（季調済）



（図表3）トルコの研究開発投資



（図表4）トルコの研究者人口

